香水と着ぐるみ

塚田源秀

家路につく。築三十年の古アパートに郷田（ごうだ）洋平（ようへい）は住んでいる。ドアを開けるやいなや、バラや金木犀などの香りが彼の体を覆った。簡単な夕食を終え、いつもの香水作りをする。壁面にある棚に、赤や黄、青などの小瓶がずらっと並ぶ。バラやラベンダー、ミント、ローズマリー、沈丁花、金木犀、苔など花木から採った天然の香水であり、その色も花を粉にしてウオッカに漬けたものである。中には畑の土やヘビの抜け殻、鳥の羽根、トカゲの尻尾から採取した香水もある。決して人工的な合成香料のものを使わず、ファッション的な香水も嫌った。彼はカバンの中から、三つのジップロックを取り出した。その中には、今日採取してきた芍薬（しゃくやく）、猫の尿、羊の毛があった。ハサミやナイフ、乳鉢を使ってそれぞれの素材を細かくしていく。再びジップロックに戻し、スポイトでウオッカを表面に濡らす程度にたらす。その加減が難しく、注ぐ量が多ければ素材の匂いそのものが薄くなり、少なければ素材が無駄になってしまう。空気を抜いてしっかりジッパーを閉め、七十度くらいの湯の中で一時間くらい湯煎する。ローズマリーなどのハーブ系の葉は湯煎せず、手で優しく揉んで常温で抽出する。熱で壊されてしまうからだ。そしていくつかの過程があり、最後に濾過をして小瓶に移した。

郷田は、やっと自分にあった仕事にありつけたと思った。親兄弟もなく、ずっと父の兄弟である叔父たちの家をたらい回しにされ、義務教育である中学だけはなんとか卒業できたものの、中部の山奥からでてきた、というよりも逃げてきたというのが正しいかもしれない。もちろん知人友人もなく、自分の身ひとつで、お金というのもまったく無

いに等しかった。いろんな仕事に就いた。人と接する仕事を避け、とにかく自分ひとりでできる作業、多くが店舗やビルの掃除、道路の警備員など、とくに人手が足りない夜間に入った。あまり人前に出たくはなかったし、雇う側も彼を重宝がり時給もいくらか高くしてくれたこともあった。世間が言う汚い、きつい作業もいとわない。ただ、まるきり独りでする仕事というのはなく、やはり何人かのチームを組まざるを得ない。そのことだけが煩わしく、一緒に働いている者からよく疎まれる存在であった。雇い主は「どうして辞めるの？　正社員の道もあるのに」と残念がるが、すみません、と頭を下げた。

山から下りて、人口二万人足らずの地方のA町へ住んでもう六年、二十一になってしまった。二十一といえば、社会では若いというより幼い年齢かもしれないが、郷田にとってはこの六年、仕事以外は誰とも喋ることもなく、酒も飲まず、女と付き合うこともせず、古びた六畳一間のアパートでただただ独り自分と向き合うしかなかった。中学の同級生を町で見かけると、向こうはピカピカの大きなセダン型の国産なのか外車なのかわからなかったが、助手席に女を乗せ、窓ガラスを下ろして、「やあ、洋っち、生きてたのか？　まだヨチヨチ歩いてんのか」とニヤッと笑う。女もクスッと笑っているようで、すぐにタイヤを鳴らして消えてしまった。町にいた多くの同級生は、大体がそういう輩だった。

そんな郷田にも、ゆいいつ趣味というより、癒しと言ったほうがぴったりくるのかもしれないが、花や木を見、香りを嗅ぐことが好きであった。自然界には匂いがあふれている。その匂いを物質から切り離した喜びがある。家に帰れば香水を作った。チンキ法という、古来、人類が用いてきた原始的な抽出法である。芍薬（しゃくやく）、猫の尿、羊の毛から抽出した今夜の香水は三日後に落ち着き、一週間後あたりがちょうどいい香りとなる。彼は目を閉じて作り終えた三つの香りを嗅ぎ、瓶の蓋をして棚に並べた。

さて、彼にあった仕事というのは、A町に開園されたフラワーパークでの仕事であった。町おこしの一環として開園された公園は、丘陵地を切り開き、フラワーパークの名のごとく、花と緑のごくありふれた施設であったが、とにかく広大で羊や山羊もいた。町としても多くの地元の人を雇用し、たくさんの観光客に来てもらってお金を落としてもらう算段であった。国や県、町から数億円の資金が充てられ、A町にとっては一大事業である。採用にあたって多種の求人募集があり、その職種のひとつに、造園部「花や木の植栽、清掃業務」があった。十数名の募集であった。

面接に行くと、その場で採用と決まった。またチームワークで仕事をせざるを得ないのかと思う気持ちもあったが、いきなりの採用だったので、変に考える余地がなかったのである。開園してわかったのだが、オープン当初の人出を見込んで、ゴミの収集、トイレの清掃が追いつかないということで、多くの人材を採ったのではないかと、同じ部署から不満がでていた。本来の木や花にたずさわる業務は後回しであった。確かに天気のいい土日、祝日は、あふれ出たゴミの回収と便器にこびり付いたウンチの清掃である。集客数が一万人を超えると二十分おきに軽トラでトイレットペーパーを何十個と積み、代わりにたくさんのゴミを集めて広い園内を回っていかなければならない。

「郷田くん、嫌な顔をすこしも見せず、よくがんばるな。他の若い連中はもう辞めるってよ」

同じ部署で働く七十前後の男が軽トラの運転席側に乗ってきて、エンジンをかけた。助手席に座っていた郷田は「はあ」と頭を下げ「僕、この仕事、苦じゃないです」と前を見た。

「聞いた話だけど、お父さん、お母さんもいないんだって」

「ええ、僕が小さい時に二人とも亡くなりました」

「そりゃあ、大変だったな」

「ほとんど記憶がないんです。本当に小さかったから」

郷田は感情を表にださず、ぽつりぽつりと言葉にした。

彼は車から降り、火バサミとゴミ袋を手にし、園内に落ちているゴミを拾い、各所に設けてあるゴミ箱を見て回る。園内の中心には何万本もの菜の花が咲き、別のエリアでは色とりどりのチューリップが美しさを競い、沿道には可憐なパンジー、マリーゴールド、サルビア、ライラック……それぞれの花や木の前で目を閉じすっと鼻で吸い込む。往来する人、人、人の波など我関せずといった様子で、波に取り残された石のようにぽつんと立ち止まって集中して匂いを嗅いでいく。山からの春の風が香りを拡散していく。行き交う観光客が彼を見ると、植栽された花木の様子を見ているのだと思うだろう。花や木にはそれぞれの香りがあるが、出来のいい香り、悪い香りというのもある。彼にはそれが嗅ぎ分けることができた。それは学習して得たというものではなく、小さい頃からいやが上にも味わった経験からくるものだった。もちろんその良し悪しというのは彼の基準ではあったが。

子供の頃、事あるごとに、よく叔父の家の前の木に縛られていた。数年にわたって、大体は二、三時間、長い時は半日という日もあった。二メートル先は崖っぷちで、足がすくむ怖さもあったが見晴らしは悪くなかった。見渡す限り山、眼下には棚田とその向こうには小さくA町が見えた。話し相手は、山そのもの。木や花、風の匂いを嗅ぎ、虫の匂いや音を聞いていると季節の変化を肌で敏感に感じざるを得なかった。

郷田は不思議な感覚でいた。山から下りてくる優しい風と山へ吹き上げてきた厳しい風の記憶を嗅ぎ分けながら、今ここにいるんだという実感を持つ。歩を進める。それにしてもあの匂いはどこから来るのだろうかと、ふと思った。数日まえにもその匂いがあって、これで三度目である。園内にある花や木であればすぐわかる。風が運んで来たか、山から運ばれてきたものだと、大体は予測がつくものだが。それとも誰かが持ってきた

香り、それともその人物のものか、郷田はその匂いのことが、頭の隅っこではあったがずっと気になっていた。

ゴミ箱のところに着いた。燃えるゴミ、燃えないゴミ、缶・ビン、ペットボトルに分けたゴミ箱であったが、どれも溢れかえっている。甘さと酸が入り混じった化学調味料の臭いが鼻につく。郷田らのスタッフたちが、木を貼り合わせ茶系の塗料をぬり、景観に溶け込むように作ったものだ。溢れたゴミを拾い、丁寧に仕分けし、縛って新しい袋に代え、フェンス向こうのバックヤードへ持っていく。近くのトイレでは、清掃中の標示を表に出し、男子女子と問わずやった。便器にこびり付いたウンチをブラシで落とし、散乱するトイレットペーパーの紙片と芯などを掃き取り、床に水を撒き拭取る。一連の作業を淡々とこなす。同じ部署の若いスタッフが不満をこぼしていたというが、普通の感覚であればそうだろうな、と郷田は頭を振る。

「本当はお前に食わせる飯などないんだからな」叔父夫婦の口癖だった。何かにつけ家の前の杉の木に縄やロープでしゃがんだ姿勢で二重三重に縛られていた。冬の風の強い日はつらかった。まだ雪の日は暖かかった。最初のうちはよく泣いたが、慣れというものは恐ろしいもので、これを我慢大会だと思ったり、そして説明しづらいのだが成り代りと言えばいいのか、よく自分を擬人化し苦痛を転化させるような心の切り替えもやった。両腕は後ろにまわされて両手首を縛られ、両脚も伸ばすことができなかった。しびれや痛みはとうに過ぎて、まるで自分の脚が重たい異物のものとして引っ付いているような感覚だった。ずっと何年もの間、繰り返しこの姿勢でいたものだから、後に歩く際に前のめりになり小さな子供が歩くようなヨチヨチのようにしか歩けなくなってしまった。走りの場合にはとくにそうで、体育の時間は大嫌いであった。だから、同級生によくいじめられた。木に縛られていたというと、今の時代にといわれるかもしれないが、山の上のぽつんと一軒屋で、誰が見ていよう。下界にしたって家の中で虐待され、殺さ

れることが日常茶飯事じゃないだろうか。

トイレ掃除にはきまって消臭剤が使われるが、郷田はこの臭いに閉口した。仕事だから仕方なく使うが、ゴミから出る化学調味料の臭いにしてもそうだ。他方、人間、いや動物にしてもそうだが、尿や糞、死骸の腐敗臭は、まったく気にならない。自然の摂理であるから、むしろ嫌がることがおかしいと感じる。それもあの木に縛られて体得した感覚なのだろう。彼の臭覚は、人間よりもむしろ動物に近いのかもしれない。

部署に帰れば、ほとんどのスタッフが戻っていて、若い者は長机にうなだれていた。年配者は一様に腕をくんで無言で座っていた。誰一人声をかけることなく、静かであった。郷田も長机の隅に腰掛け、わずかばかりの休憩をとった。

オープン間もないということもあり、忙しい作業をこなしてきた郷田であったが、この仕事だったら長く続けられそうだと思いはじめていた。そんな矢先のことだった。事務所から企画担当の小川係長が造園部署に来て、うちの責任者と何か話し合っていた。しばらくすると、二人の視線が郷田の方へ向けられ、責任者にちょっとと手招きされた。

「郷田、企画部さんからのお願いがあってな。怪獣の着ぐるみに入ってもらえないかって」

「突然のお願いで申し訳ないね、郷田くん。着ぐるみに入ってもらうアルバイトの子が急に来られなくなって。それで各部署に回ったんだが、どこもダメで、それで造園さんにお願いに来た次第なんだ」

「はい……」

「難しいことは何にもなくて、園内を練り歩くだけでいいんだ」

「オマエの体形だとぴったり合うんじゃないか。戦力としてオマエをいっときでも失うのは痛手だけど、まあ皆で協力し合わないとな」

ゴールデンウィーク前の日曜日、天気もよく花々も咲き誇っていて入園者は多かった。指示された催事ホールの裏手に郷田が入ると、小川係長と着ぐるみに入るアルバイトの若い男女が二人いた。着ぐるみは三体で、スーパーなどの催事で見かける、もふもふの生地で緑色のいかにも子ども向けのものだった。公園に怪獣現るというテーマで、恐竜が園内くまなく出没し、子ども、家族に喜んでもらうというイベントのようだ。十一時、十三時、十五時の計三回で、一回あたり三十分、両腕を広げてガオーのポーズをとるなど怪獣らしく振舞って欲しいとの事だ。

「今の気温、二十三度。着ぐるみの中は暑いから、くれぐれも脱水症状には気をつけて。そして、着ぐるみでトイレはいけないから。後は子どもが絡んでくるから、怪我させないように」

小川係長は、さっそく郷田に着ぐるみに入るように促した。汗や臭いが着ぐるみに付かないよう、私服の長袖、ジーパンのまま入った。長靴をはくように足を交互に入れ、腕、頭の順にかぶった。

「今日は、僕が同行させてもらうから」

係長は、背中にあるチャックを尻尾から頭までスッと閉めた。

外に出た。生地は薄手で重たくはないが、とくに脚の動かし方が難しかった。恐竜の口にあたるところから見えるようになっていたが、それでも視界は狭く足元のまわりはまったく見えなかった。アルバイトの二人は慣れていることもあって行ってきまーすと言って、尻尾をひきずって園内に出て行った。

「さあ、郷田くん、行こうか」彼の後ろを付いてヨチヨチ歩く。ん？　最初は戸惑ったものの、ぎこちない自分の歩き方が妙に自然な感じに受け取れた。着ぐるみのゆったりした動き、つまり動きに制限があるのが逆に自分に合っているのかもしれない。係長も「なんか、すごくいいね。歩き方も恐竜っぽいよ」と背中をぽんぽんと叩く。両腕を上

げて体を反らし、揺らしながら「ガオー」というポーズをとる。しかし、けっして声は出してはいけないのだ。「恐竜や」と走ってくる子どもや、じっとこっちを見てかたまっている子、お父さんやお母さんに抱っこされた小さな子が泣き出したり、一緒に写真をとったりと、着ぐるみを被るだけで、まるっきり世界が変わり人気者になれるのだと思った。そこに別人格がいるようだった。いまだかつて、このように接してくれる人たちなど誰ひとりいなかった。係長の指示通りに動いていれば何のトラブルもなくやり終えた。三十分があっという間に過ぎてしまった。控えの場所で恐竜を脱ぐと、全身汗びっしょりだった。ペットボトルの水をゴクゴクと飲んで、ふうっと息をつく。顔を上げると、係長の満面の顔があってグーサインをだした。どこか照れくささはあったものの、不思議な充実感であった。

ゴールデンウィーク中も、造園部の作業もやりつつ、着ぐるみに入った。毎回着ぐるみが変わって、国民的アニメやギャグアニメのキャラクターなどにも入った。着ぐるみの脱着の際は手伝ってくれたが、園内へ出るときはほとんど一人であった。ギャグアニメのキャラクターは、恐竜もそうなのだが、叩かれる、蹴られる傾向にある。子どもならいざ知らず、若い女性から蹴られることが多かった。国民的アニメのキャラクターの場合は、誰からも愛される存在なのか、若い女性から抱きついてきた。郷田も抱きつく仕草をしてあげるとなかなか離れてはくれない。きれいな女性が今、彼の胸の中にある。郷田は自分を擬人化させ苦痛を転化させようとした縛られた日々のことを思い巡らす。そして、この着ぐるみという存在。厚手の生地一枚をはさんで、胸の中にいる彼女は彼の存在を意識してはいないのだろうか。彼女の匂いがすっと彼の鼻腔をくすぐり、更にあの頃を思い起こしてしまった。

叔父夫婦には、郷田より一歳下の一人娘、好子ちゃんがいた。一緒に遊ぶことが許されなかった。気立てのいい子で、小学生の頃までは、木に縛られる際に両親の目を盗ん

で、やさしく声をかけてくれた。夏はアイスキャンディ、冬はほかほかのサツマイモや肉まんを持ってきてくれた。寒いね、冷たいね、ごめんねと体を寄せてさすってくれた。叔父夫婦にはまったく感じられない、やさしさがあった。冬の時期でも春の花を届けてくれるような温かさがあった。彼女の香りは今でも忘れない。けれども、中学に入り、彼女の郷田に対する接し方が一変した。学校でも木に縛られているときでもまともに視線を合わせず、彼女の友達らと一緒の場合などは、遠くあざけ笑う様な仕草を見せた。郷田と一緒に住んでいることが恥ずかしかったのか、彼女の自尊感情がそうしたのだろうか。

あの日は学校からの帰り道だった。山の中で突然雨が降りだし、麓から湧き出るように霞と雨が辺り一面を白く染め上げていった。舗装されていないつづら折りの細い路で、姿は見えないが何メートルか先からキーコキーコという消えそうなゆっくりとした音がしたので、自転車を押す好子ちゃんだとわかった。彼女の自転車にはいつもその異音がしたからだ。郷田は自転車から降りて彼女に近づいて行った。彼女は合羽を着ていなくて、ずぶ濡れであった。

「好子ちゃん、好子ちゃん、ちょっと」

声を掛けるが、雨のせいか振り向きもしない。小走りで追いかけていくと、振り向きざまにきっとした目で彼を見た。

「これ」

脱いだ合羽を彼女に差し出した。

「いらない」

彼女は無視して前を歩く。

「でも、風邪ひくよ」

「しつこいわね、近寄らないで」

彼の手をはねつけた瞬間、バランスを崩しぬかるんだ泥に足をとられ、あっと声を出したと思ったら、崖から自転車ごところがり落ちていった。まるでスローモーションのような映像だった。そして、白い浮遊物が彼女を崖下へさらっていった。何度も声を掛けたが、何の反応もなかった。あっけなかった。命というもの、本当はこんなものなのか。目の前で多くの虫や動物の死を見てきた彼には、むしろそのことが自然のように思えてきた。アリを指先でつぶす感覚に似ているのかもしれない。

郷田は、とっさに抱きついているきれいな女性を突き放した。唖然とした彼女の表情が、着ぐるみの喉の視界から垣間見えた。どうしたわけだろう、この突き上げてきた感情は……。郷田はくるっと踵を返した。

Aフラワーパークが開業して数ヵ月が経ったころ、時代は「ゆるキャラ」ブームであった。このゆるキャラ、「ゆるいマスコットキャラクター」の略で地域おこしや特産品の紹介などのPRなどのイメージキャラクターである。これといったシンボルや特産品がないA町も当然ブームに乗り遅れてはいけないと、町の担当者もいろいろ躍起になっていた。それは町長からの強い指示があってのことである。やや後発だったこともあり、考えられる特産品や花木もすべて他の地方自治体で既に使われてキャラクター化されていた。町の担当者は、Aパークのキャラクターをそのまま A町のマスコットとして使わせて欲しいと依頼してきた。主旨としては、町の一大事業施設でもあり、町の顔でもあって当然といえば当然であろう。施設の支配人も、町からの出向者であることからとんとん拍子に事が運んだ。

この頃Aパークでは、既に名の如く「Aぴょん」という独自のキャラクターをつくりだし、着ぐるみもあった。A文字を花形にイメージにされたキャラクターで、もちろん郷田が入っていた。平日は花や木の植え替え、清掃の本来の仕事をし、土日祝は着ぐる

みに入った。「Ａぴょん」は頭のところを大きく、脚のところは細かく動けるよう、郷田の体にそっての造りになっていた。彼も花や木に触れ、一方で擬人化した者に転化できる自分を楽しんでいた。また、ネット上でアップされていたお客の撮ったＡぴょんの動画を観ながら、どういうふうに個性を出したらいいか、いつも考えていた。ふと個性を出すという言葉すら、彼の今までの人生にあっただろうか、と不思議に思う時がある。それにしても、ずっとコンプレックスであったヨチヨチ歩きが一枚生地を被るだけで「かわいい」「癒される」と言われ、喜びの感情のなかに、不意に奥底からねじれた、自分を突き動かす憎悪の塊のようなものが見え隠れする時がある。

町の担当者、Ａパークの支配人、小川係長、そして郷田との中で話し合いの場が持たれた。ＡぴょんがＡ町のキャラクターになる上で、いろんなことが話された。Ａぴょんが町のＰＲ大使になるということで、Ａ町の観光ＰＲ、メディア対応、ゆるキャラの全国イベントなど……。郷田は、盛り上がる話の中で、うつむき加減でただ静かに聞いているだけであった。

「で、Ａぴょんは一体しかいない。それは、一人の人格として」

町の担当者の言葉に三人の視線が郷田に注がれた。このＡ施設にいて、同時に他所でＰＲやイベントに参加はない、つまりは二体と存在しない。他所でイベントに出かけているときは施設では留守ということなのだ。

「そして、Ａぴょんの人格を創り上げなければならないのだが、郷田くんが入っていることが知られてはまずいんだ」

町の担当者が加えて言う。施設内の多くのスタッフには知られているが、守秘義務として徹底し、家族にも話してはいけないという。

着ぐるみはＡパークが管理する一体のみであったが、あと二体作られ、一体は役場の観光課に、もう一つは緊急時として郷田が持つことになった。

郷田は普段の仕事に戻った。今やることは、今秋から来春に向けての花や木の準備だ。今日は、来春に向けて菜の花畑の準備をするためヒマワリ畑を掘り起こし、土地を一時休ませなければならない。耕運機を使って土地をならしていく。ヒマワリの終った匂いが山からの風で流れていく。耕運機のガラガラする音がむしろ静かな空間をつくりあげているようだった。造園の部署のスタッフは年配者が仕切っているせいもあって、無駄口をたたく者もいない。土に接した汗の匂いでわかるのだ。ただ他部署からは遠巻きながら噂しているような空気は伝わってきた。だからといって郷田には浮ついた感情など微塵もなくいつも平然としていた。

簡単な夕食を終え、郷田はカバンの中から二つのジップロックを取り出した。今日はヒマワリの花びらとセミの抜け殻を採取してきた。いつも通りに淡々と作業をこなしていく。しかし彼の頭の中には、あの匂いが頭から離れない。あれは官能的でありながら濁りのない香りだった。それがここまで記憶に留まっているとは……。彼は、その香りがムスクの存在にも似ていると思った。ムスクは、オスの麝香（じゃこう）鹿（しか）の香嚢（こうのう）という部位から出る分泌液を乾燥したもので、その香りでメスを引き寄せたり、縄張りを示すのである。麝香鹿は乱獲され、今ではワシントン条約で取引が禁止されている。郷田も本当のムスクの香りは知らない。古代から、香料の役割を担ってきており、香りは獣のアンモニア臭であるが、ごくわずかな量を香水に加えるだけで豊かさの香りに変化し、広がりと持続性を持つといわれている。「鹿の放つ香りが矢を射るように遠くまで飛ぶ」ということを漢字でも表現しているのだから、魅惑的な香りだったのであろう。

彼は香水を作り終えると、小学校での課外授業のことを思い出した。山が近かったこともあり、自然を題材にした授業がいくつかあった。自然の香りを楽しむための香水づくりもそのひとつ。生徒が野山に入って多くの花や木、土、昆虫の死骸というもの採取

した。誰かが毒きのこを採ってきて先生にひどく叱られたこともあった。採取したものを学校に持ち帰り化学実験みたいに多くの種類の香水を作って、皆が夢中になった。白い花はたいてい香りがつよくいい匂いがし、針葉樹はクールなミントガムのような匂いがした。出来上がった香水と採取した現物とが符合するかというクイズをクラス全員でしたことがあった。サンプル数は三十五あって、符合率は三割程度で先生でさえも五割いくかどうかだった。郷田はすべて言い当てて、クラスがざわつき、先生も驚嘆していたことを覚えている。いつも日陰にいた彼が、ゆいいつ注目された瞬間だった。匂いを物質から切り離した時、もうひとつの世界があるのだと、子どもなりに実感した時だった。

数日後、Ａぴょんが部屋に届いた。反対側の壁のほうに置いた。香水の匂いが移らないように二重、三重にビニールを被せ、香水と着ぐるみを交互に見やる。二つとも異質の物であるが、人間に纏うという意味では同質なものではないかと、ふと郷田は思った。とくに女性を魅了する上で、二つの存在は姿をかえたものにすぎないと。ならば、この二つを一つにしたらどうなるのか――。

にわかに郷田のまわりが騒がしくなってきた。というより正確に言えば、Ａぴょんのほうが忙しく周囲に多くの関係者が出入りするようになった。ＡぴょんのキーホルダーやＴシャツ、お菓子も作られ、取材も多くなってきた。そして、Ａパークの催事ホールの裏手に鍵がかかる控え室が作られ、手書きの催事案内もすべて業者が作ることになり、看板やポップ等も一流タレント並みのものとなった。集客数も右肩上がりで、とにかく園全体が盛り上がっている感じがしてきた。支配人や町の担当者も、当面、造園業は休んでＡぴょんの仕事に専念したらどうかと郷田に聞いてきたが、彼はそれを断った。園内外のＰＲ活動も忙しくなるのは承知しているが、やはり本業は花や木に触れ、清掃業務に携わっていたいと頭を下げた。隣に座っていた小川係長も「Ａぴょんの本来の姿は

……昔あったヒーローもののアニメ番組みたいですよね。すごくドラマになりますよ」と思い立ったように声を上げた。

はじめて東京へ来た。Ａ町近郊の小さな街へは何度か行ったことはあったが、大都会ははじめてだった。それも東京である。平らな土地と山ばっかりを見てきた彼には、多くの高層ビルに人がいるということ自体、考えられなかった。霞かスモッグかわからなかったが、ビルに霧のようなものがかかり、まるで山の様相そっくりだと息を呑んだ。

全国の各自治体の観光ＰＲのために着ぐるみのキャラクター達がイベント会場に一堂に集まった。着替えるための控え室もあったが、多くが駐車場に停めた各々の大型ハイエースの中で着替えた。郷田らもそうした。控え室であれば、同じ業種といっても人目にさらすことになり、キャラクターの人格を下げてしまうからだ。一様に窓ガラスにカーテンをし、フロントガラスの面にも目隠しをした。Ａ町にとっては大都会への初陣とあって郷田以外のスタッフは緊張気味であった。郷田はいつも通り淡々としていた。

「ゆるキャラのみんな、どうぞ」司会の掛け声と同時にステージ上にゆるキャラ五十体がところ狭しと集まった。その瞬間、Ａぴょんもゆるキャラの一員なのだと改めて周りの着ぐるみを眺めた。有名なゆるキャラも二、三来ていて、やはりその人気ぶりはすごい。登場するやいなや、割れんばかりの拍手が起こった。手を振るだけの仕草で観客席からキャーという歓声が上がる。視界が狭いためになかなかわかりづらいのだが、彼らの一挙手一投足に観客は釘付けのようである。Ａぴょんの喉から、郷田は眼を凝らして彼らを見る。たしかに場慣れしていて、グリーティングの振る舞いも一枚上手のような気がする。小川係長の言葉どおり、振付師か演出家が付いているのだろう。すると突然、誰かが後ろから押したのか、ぶつかったのかわからないが、前へ押し出される格好になり、前のめりの姿勢でステージ前までヨチヨチ歩きをせざるを得なかった。はっとした

のも束の間、司会者の口から「出ました！　Ａぴょんのヨチヨチ歩き」と発せられた。偶然のアクシデントであったが、観客席からは大歓声があがった。後はなりゆきまかせでパフォーマンスをやった。周りからは目立ちやがってと思われても仕方がない。偶然が、絶妙なタイミングを作ったのだ。

あっという間にショーが終わり、五十体のゆるキャラが舞台裏に下がった。周りのキャラからは冷ややかな視線が伝わってくるのかと思いきや皆は温かく受け入れてくれた。

帰路、都心の高層ビル群の中を車でくぐり抜けながら、窓ガラスから流れる高層ビルたちをずっと見上げる。どれも一様な姿であるが、高さを目指してどこか競い合っているように見えた。窓ガラスを下して、流れていく外気を吸う。無機質でありながら、それぞれが何かしらの匂いを持っているような。それは、そこで仕事をする人、住む人達の集合体の匂いなのかもしれない。一堂に集まった五十体のゆるキャラを思い浮かべる。人気キャラクターは別にして、他はどんぐりの背比べであった。もう少しパフォーマンスを磨けば、人気キャラにも近づけ追い越すことも可能だと思う。そして彼らにはない秘策を郷田は持っていて、既に今回のステージでもわずかであるが試していたのだ。それは彼が作った香水であった。人気キャラであってもその点に関しては無関心なようで、いずれも汗臭さを抑える人工の消臭剤を使っている。ひどいキャラは汗と消臭剤が混じりあって異臭を放っていた。だったら汗のままで、消臭剤を使わない方がよっぽどましなのにと言いたくなる。郷田は今回、バラと土を配合させた香水を使った。Ａぴょんの耳うしろ、手首、足首、郷田の体にもつけた。人工でないためにツンとくる刺激臭もない。愛と清純さを象徴するバラの香りと、森林浴ならぬ土壌浴というアロマが溶け合い、幸福感をもたらすドーパミンを放出する効果がうまくでていたように振り返る。あのステージ上のハプニングはどうみても、周りの反感を買うだけなのに、司会者、前列の観客、そしてキャラ達も好意的に受け入れてくれたのだ。でも彼は知っている。香水は一

時的なもので、長続きはしないものだと。

銭湯に行く。香水を作った後は、そう決めている。調合する際、どうしても強い匂いが体に付着するからだ。閉店近い時間ということもあり、男湯には郷田ひとりであった。鏡の前に立って、まじまじと自分の姿を見る。どう見たって貧相な体形である。しかし、そんな彼もようやく日の目をみることができたのである。それにしても皮肉なものである。一皮むけばの逆ではないが、一皮を被れば、こうも世界が変わるものかと。目を閉じると、中学の美術の時間のある場面が蘇ってきた。先生は一見穏やかであるが、眼光するどい髭の長い、芸術家か哲学者のような風貌であった。その日、美術室には大きなダンボール箱の中に瓦礫のようないろんな形の石膏があって、生徒はそれぞれ彫りたい石膏を手にした。「この石膏の真ん中に、君たちの彫りたいものが隠されているから、それに向かって一所懸命、彫りなさい」と。郷田はよそ見をせずに、ひたすら彫刻刀で彫り続けた。隠れているものはないか更に彫り続けたが、何も見つからず全て彫り尽くしてしまったのである。周りをみれば、女子生徒はウサギをはじめとするかわいい小動物、男子は手や足などの身体の部位を彫っていた。先生は彼のところに来て「何を彫ったのかね？」と彫り尽くした残骸の石膏に手を触れた。

「彫っても、何も見つかりませんでした」

一斉に笑い声がした。

「そうか。何も見つからなかったか」先生は髭を触りながら「期限は設けないから、もう一度彫りなさい。きっと何かが隠されているから」

先生は、もう一つ石膏を持ってきて、彼に渡した。

放課後の時間、美術室に行き何を彫ろうかずっと考えていた。

そして後日、先生のところに彫り上げた作品を持っていった。

「出来上がったんだね。見せてごらん」
「はい」
郷田は包んだ新聞紙を外して、先生の机の上に置いた。
「髑髏（どくろ）か……」
「はい。ずっと考えていましたけど、これしか浮ばなくて」
「人間は一皮むけば皆同じ白いガイコツってわけか。家は真宗の寺やっててな、わしも坊主なんよ」
先生は髑髏を手にして、熟視する。「表面的なことはすべて虚ろなこと。真の美ってやつは皮膚の下にあるのかも知れないな。御文（おふみ）さんに書かれている世界や」
ぎょろっとした視線が郷田に向けられた。
郷田は目を開けて、自分の姿を鏡越しに見る。
Aぴょんの姿を被せながら、彼は右足を爪先立ちにして左足を後ろにスライドさせる。重心のかけかたが難しく、ふらついてしまう。マイケル・ジャクソンのムーンウォークである。その格好いい動きが、Aぴょんのパフォーマンスに取り入れられたらと、何度も繰り返す。一回はできるが、左右交互に連続となると、なかなかできるものではない。東京から帰って一週間、場所を選ばず練習する。ヨチヨチ歩きとムーンウォークを合わせれば、パフォーマンスの質をアップさせるに違いない。一汗かき、入浴する。

ここ最近、A町の観光PRが大々的に行われ、役場の観光課、企画課も大童（おおわらわ）であった。二つの課から二、三人の男性職員が携わるだけの最低人数で対応していた。誰もここまで忙しくなるとは予想していなかったこともあり、Aぴょんの素性を守るためには良策ではあったが、いかんせん人の手が足りなくなってきた。
そんな折、町長の秘書兼広報の女性が加わった。町長も観光PRに積極的に係わって

いて、彼からの指示でもあった。そんなある日、Ａぴょんを訪ねて彼女が施設にやってきた。小川係長から郷田の携帯へ連絡があり、着ぐるみになって事務所へ来て欲しいとのことだ。その時、郷田は事務所のある入場ゲートに近い花壇で草引きの作業を行っていた。引いた草をバケツに入れ、入場ゲートを見た。彼は目を閉じて鼻をひくひくさせた。かすかな匂いだったが、ある予感めいたものが走った。開園当初から、幾度となく彼の鼻を掠めてきた匂いだった。するとゲート裏から支配人、小川係長、白いブラウスに紺のスカートの若い女性が出てきた。一陣の風が吹く。はっとして手に持っていたバケツを落としてしまった。三人の視線が郷田に向く。視線を外し何事もなかったようにバケツを手にして、催事ホールへ向かった。やはり彼女だった。彼にはやはりという確信があったのだ。彼は多くの人の匂いを嗅いできた、この施設にしても開園以来、十万人以上の匂いを嗅いできたのだ。そして、花木や土、動物など多くのものを嗅ぎ尽くしてきた。地球上のものすべてとは言わないが、彼の行動範囲のなかでは全部と言える。しかし、彼女からのかすかな匂いは、何物にも例えられない香りであった。幾度となく園内で香っていたのは、町長が来園した際に同行していた彼女の匂いだったのかと理解した。歩きながらいろいろと想像すると、珍しく性的興奮が脳から股間に走った。出来のいい香水を作った時も、着ぐるみ越しで美しい女と抱き合った時もこんなことはなかったのに。気を落ち着かせ、Ａぴょんのところまで走った。

事務所の扉を開けると、正面に彼女が立っていた。

「鵜飼圭子です」

軽く頭を下げた。これからお力添えできるよう頑張りますと右手を差し出した。Ａぴょんも右手を出して握手した。濁りのない美しさが今目の前に存在している。

郷田は興奮する気持ちを抑えながらも、多くの汗をかいていた。彼女の横にいた支配人がひとしきり喋ってくれていたので、すこしずつ落ち着きを取り戻せた。目を閉じて、

鼻をヒクつかせる。彼女は当然ながら香水というものをつけてはいない。きっと一度もつけたことはないくらいに肉体から少女のような無垢な匂いが立つ。この匂いの記憶を辿っていくと、子供の頃の山の景色が見えてくる。やはりそうだったのか、好子ちゃんの匂いだったのだ。心の奥深く、安らぎを感じさせてくれる百合や菫（すみれ）のような香り、邪悪性の匂いなど微塵も感じさせない……。おそらくこの気高い香りは、誰も気づいていないだろう。

家に帰っても何も手がつかなかった。香水づくりにしてもそうだ。棚にある多くの種類の香水たちに目をやるが、全ての物がぼやけてしまう。彼は頭を振る。圭子さんが放つ匂いは、どんな香水をもっても太刀打ちできない。彼女の無垢な清々しさは、きっと性格によるものだ。好子ちゃんだってそうだった。小学生までは無垢で優しさに溢れていた。しかし中学に入るや否や、匂いは変わってしまった。山の空気しか知らない彼女にとって、町の匂い、いや毒は烈しい。免疫を持たない人種がまたたく間に菌に冒されるように。年齢というのもあったのだろう。かわいそうな好子ちゃん、純粋な心だっただけに下界にいたしょんべん臭い少年少女たちの色にすぐ染まってしまったのだから。

すべての香水をシンクに流した。新しく究極の香りを求めていく上で仕方ないことなのだ。すると排水溝から入り混じった匂いが漂ってくる。

何日か後、圭子さんらと県内外へＰＲ活動に出掛けた。他のスタッフは当然、郷田の存在を知っていたが、彼女にはまだ知らされていない。道中、車の中での着替えもあって、彼女は別行動をとっていた。そのうち彼女にも郷田のことを知ってもらおう、と郷田以外の意見はまとまっていた。郷田本人にも答えを求められたが「はい……」と頷くだけだった。ただ、彼女の香りを知った時から、高揚した気持ち、性的興奮を抑えるのに必死であった。車での道中、せまい空間だけに彼女と一緒となるとどうなるかと彼にも想像はつかなかった。

その日、客はもちろん、Aぴょんやスタッフに対しても圭子さんの立ち振る舞いは完璧なものであった。すべてにおいてでしゃばらず、それでいて気配り、心配りしている姿が眩しかった。彼女のまわりには常に人が集まり笑いがあった。それは仕事だからというものではなく、やはり、そこには思いやりやおもてなしといった高い精神性が宿っているに違いない。

ある日の夕方から夜にかけて、A町は秋のお祭りで露店も出て大賑わいであった。騒音なみの音楽が流れ、若い男の奇声や女の笑い声が郷田の部屋にも届いていた。そして人間の性根というべく剥きだしの臭いがぷんぷんと彼の鼻腔をくすぐった。彼は眠ってはいなかったが、目を閉じ横になっていた。騒ぎが静まった頃、彼はおもむろに起き上がり、Aぴょんを被った。

部屋を出て町のなかを平然と歩く。とっぷりと日が暮れていたので、多くの人はもう家路に向かっていたが、若い男女のグループや屋台などの片付けをしている業者などはまだ残っていた。Aぴょんが歩いていても、誰からも話しかけられなかった。お祭りのイベントに参加してその帰りぐらいにしか映らなかったのかもしれない。出演するのは明日のお昼である。Aぴょんとして、夜の道を歩くのは初めてであった。外灯はあるものの、着ぐるみの中からは足元の視界が全く見えず、どこか宙に浮いているような感覚で歩いていた。脂ぎった中心街は、どこか性交の後の臭いがしているようで、早くこの場所から逃げ出したくなるほどだった。

圭子さんのアパートの前に着く。仕事仲間だから住所を探すまでもなかった、一人暮らしというのも聞いていた。階段で三階まで上がる。悠々としていると、不思議と誰とも会わないものである。さすがに彼女のドアの前まで来ると心臓の高鳴りが強くなった。

呼出しベルを押す。しばらくして、はい、と小さな声が返ってきた。どう応えたらい

いのか一瞬ろうばいしたが、Aぴょんです、と静かに語りかけた。着ぐるみとして声を発することはないが、それはあくまでもお客の前という前提である。が、着ぐるみを通して彼女との会話があったかと思うと、郷田は急に不安になった。郷田の声を認識していたかどうか……。

ドアがすこし開いた。

「Aぴょん、どうしたの、明日のことで？」

怪訝そうな表情であったが、Aぴょんの姿に間違いないと感じたのか、どこかほっとした顔色になった。部屋からの彼女の香りを全身に受ける。

「……」

「とにかく、入って」

外の様子を窺って、ドアを大きく開けた。ぎりぎりのドア幅になんとか頭が入った。

足の裏を拭いてもらって、部屋に入る。こざっぱりした部屋に彼女と向き合う。ジーンズに長袖の白いシャツである。

「どうしたの？　急用なの？」

「……あの……」

「頭だけでも脱いだらどうですか、でないと話もできないし」

彼女は彼の前にきて、Aぴょんの頭を脱ぐのを手伝ってくれた。郷田は自分の顔をはじめて彼女にさらすことに対して、どんな顔をすればいいのか。後ろめたさやコンプレックス、恥ずかしさなどが一緒くたになって全身からじわっと汗が滲む。頭が取れた瞬間、彼女はあっ、と声を出した。あなただったのね、と彼の顔を見つめている。

「お茶でも淹れるわ。そこのソファにでも腰掛けていて」

彼女はキッチンへ向かった。

郷田はソファに腰掛け、周りを見た。派手さもないがかといって地味でもない。無垢

の木の温もりが感じられ、動物や植物などをモチーフにした器やカーテン、家具などがうまく調和している。カモメやオジロワシの飛ぶ姿、トナカイやオオカミが大地を走り、クジラが泳ぐ、風に舞う花々……。彼の想像した通りだった。目をつぶって、彼女のありとあらゆる匂いを嗅ごうと努めた。一平面だけではなく幾重にも重なっている複雑な香り、アーモンドやオレンジ、どこか危険なキノコの匂い……。まるで彼が育った山そのものの香り、豊潤であり清らかさも兼ね備えたこの匂いは、彼がずっと作ってきた香水とは似て非なるもの、この匂いを自分のものにしたいという欲求が突き上げてきた。今しかない。

彼は上半身の着ぐるみを外し、キッチンへ向かう。彼女は後ろ髪を上げていて、襟足が見えている。そこから発する香ばしい匂いに酔ってしまいそうだ。背後から一歩、二歩と詰めていく。まだ彼女は気づかない。小学生のころの好子ちゃんを重ねながら、彼女の襟足近くに鼻を近づける。彼女の全身が凍りつく刹那があり、郷田は彼女の首に手をかける。上半身がピクンと驚いた。彼女の大きな眼が飛び出すようだった。未だ経験したことのない興奮に見舞われ、両手の指にどれほどの力が加わったかということさえ、ほとんど無意識であった。叫び声もあげず抵抗もなく、彼女はその場で倒れこむように崩れていった。彼の股間は隆起し、びっしょり濡れていた。見開いた目に手をかざし、一拍おいて手をのけると、目は静かに閉じた。衣服を一枚いちまい剥がして全裸にした。そして、襟足の髪の毛をはじめ、汗や体液を全身から丁寧に抜き取った。

ふと気がつくと部屋中が、あの麓から湧き上がる靄に包まれていた。幻というのはこういうものだろうか……。それは自分の中に派生したものだろうか……。そして、あの白い浮遊物が現れて、その中にはオジロワシやクジラなどもいて、彼女をさらっていくような気がした。

あくる日も晴天であった。A町役場に設けられた臨時ステージにAぴょんのパフォーマンスをはじめ、いくつかの催し物が予定されていた。

「鵜飼さん、遅いなあ、何やってんだ」「そんな彼女じゃないんだけどなあ、携帯かけても全然でなくて」「彼女のアパートまで見てきましょうか」「もう時間ないから、始めよ」ステージ裏でスタッフたちはあたふたしていた。郷田は横付けしてあるハイエースの中でAぴょんを被り、昨夜仕込んだ香水を付けることを忘れていない。

「そろそろ時間です」スタッフの声がかかる。ステージの袖までAぴょんがいくと、平静さを失っていたスタッフたちも一変して余裕さえ見える。彼女がいないことが、まるで嘘のように。

司会のアナウンスに合わせ、ステージに上がるAぴょん、グリーティングから、ヨチヨチ歩きから初披露のムーンウォークと繰り広げていく。全町民が集まったぐらいに人、人、人、会場からは溢れ出た観客もいて、警備員の笛があちらこちらから聞えてくる。Aぴょんの一挙手一投足に割れんばかりの拍手が起こり、会場は興奮のるつぼと化していた。

山からの風が吹いた。その風はAぴょんを通して彼女の香りを乗せて会場全体に拡がっていった。彼女の襟足の毛髪などから摘出した香水であった。するとまたたく間に会場は穏やかになっていき、観客の皆が無垢な表情になっていった。最前列に座っている町長からは笑みがこぼれている。音はなにもしない、静寂のなかで目を閉じた郷田は刹那である至福を感じる……それは山で体得した悦びにも似て。

了